

現代青年の人間関係について

成 田 朋 子

I はじめに

「青年期」とは一般的に子どもからおとなへの過渡期であり、およそ12～13歳から22～23歳までの約10年間と考えられてきたのであるが、青年期が人間の生涯の中の一つの時期に対する呼称として確立するまでの歴史を跡付けてみると、青年期は社会経済的文化的要因に多大の影響を受けていること、そして、現代の社会経済的状況は、身体的にはかつてより早くから、精神的にはかつてより遅くまで青年期だとみなす傾向を助長していることがわかる。つまり、現代における青年期は以前に比して長期化しているのである。

このことに関して筆者は、青年期の真っ只中にある短期大学生および大学生にアンケート調査を行ったが、結果は、それより15年前の先行研究結果に比較して、確かに青年期の長期化を示すものであった⁽¹⁾。

それでは長期化しつつある青年期の青年達の内面はどのような状態にあるのだろうか。以前と比較して変容したのであろうか。これまで青年期は内的混乱や葛藤の多い時期と考えられてきたが、屈託のない笑顔で談笑している学生達を眺めていると、青年期の内的混乱や葛藤は時代と共に消失してしまっただのではないだろうかと考えてしまう。しかし調査した学生達の自由記述部分からは、あまり深く考えずに日々平和に暮らしている学生も確かに多いが、その反対に、内面で自分自身のことや様々なことについて悩む日々を過ごしていることをうかがわせる学生達も存在することがわかった。

長くなった青年期の中で個々の心理的葛藤は、青年期をあらわす平均的な特徴として明確に現れなくなったということであらうか。

齋藤⁽²⁾は、「現在の(大学生の)学生生活は、高校あるいは予備校までの行動様式を引きずりながらはじまり、途中模索の道へとシフトチェンジすることなく、まもなく就職に向けて準備づけ

られることになる。青年期の中心であった学生時代が、もはや、青年期の本質的な発達課題にじっくりと取り組む時代とはなりにくくなっているという状況にある。

しかし一方で『青年期の遷延』現象により、青年期が30歳くらいまで伸びているのではないかという指摘は広く受け入れられている。また一方で『発達加速現象』により思春期がより早期に始まるようになっており、10歳くらいから広い意味での青年期と考えることも可能になっており、青年期は前後に伸びることとなった。そのため時間をかけて発達課題を成し遂げていけるという側面ももちろんあるのだが、しかし同時に、本来的な課題に正面から集中的にぶつかるのではなく、なんとはなしに青年期的な気分浸っている希薄な期間が、漫然と長くなっていると言ってもいいかもしれない。」と述べ、あるシンポジウムで「悩まない、悩めないことが悩みなのかかもしれない」といった感想が語られたことを紹介している。

そもそも青年期とは、心身が成熟の水準に近づく時期であり、自己および社会環境へ適応するために、自我を確立し、それにもとづいて人格の高次の統合がなされる時期である。

青年期、青年達はさまざまな人間関係の中で、自分の性格や能力についてあれこれ思い、自分の生き方について模索する。また自分の存在そのものについてもいろいろ考える。そしてその時々新しい青年を支えるのは、友達と両親であらう。このような自分さがしのプロセスを経て、アイデンティティを確立し、社会人への準備を進めるのである。

それでは、さまざまな人間関係の中で達成されると考えられる自分さがし、自分づくりの旅を続けている青年達は一体どのような人間関係を体験しているのだろうか。短大生および大学生の記述から、現代青年の発達の特徴の一端を探ることにしよう。

II 短大生および大学生の人間関係

筆者は以前より本務校および非常勤校の受講生に、学生自身の人間関係を振り返らせ、人間関係のあり方について考えさせるために、時折、身近な人との間で展開される人間関係の過去・現在・将来の姿(状態)を記述させることを試みてきた。当初は分析することを想定して記述させたものではないため、質問項目、回答数共に資料として十分なものとは言えないが、現在筆者が取り組もうとしているテーマに資する資料と考え、分析することにした。

1. 調査の方法

①調査対象

第1グループ：

R短期大学1997(平成9)年度1年次生の内の1クラス 41名

第2グループ：

A大学1999(平成11)年度3、4年次生対象選択科目受講生 25名

第3グループ：

〳 2000(平成12)年度 〳
〳 22名

②調査時期

第1グループ：1997(平成9)年5月

第2グループ：1999(平成11)年12月

第3グループ：2000(平成12)年10月

③調査項目

質問「まわりの人々との関係がどのようなものだったか、現在どのような状態であるか、後々どのようになると考えられるか、について具体的に書いてください。」に対する回答を求めた。

第1グループはA4版用紙を配布し、横軸に子どもの頃・現在・将来の区分を、縦軸に父親・母親・祖父母・兄弟姉妹・友達・教師・その他従兄弟近所などの区分を設定して回答するよう指示した。

第2、第3グループは、上記の必要区分枠を設定し、さらに質問「これまでに人間関係で困ったことがあったと思いますが、それはどのようなことでしたか。その時、それをどのようにして解決しましたか。具体的に書いてください。」を加えたB4版用紙を準備し、回答を求めた。

2. 結果

調査用紙を提出した者の内、記載に不備のないものを分析する。また第2、第3グループには男子学生も若干名混じっていたが、第1グループが女子学生のみであるため、分析の対象から省いた。したがって第1グループ26名、第2グループ16名、第3グループ14名(すべて女子学生)の回答を分析することになった。

なお上記調査項目で述べたよう、学生自身の身近な人(父親・母親・祖父母・兄弟姉妹・友達・教師・その他従兄弟近所など)すべてに関して回答を求めたが、特に重要だと考えられる父親、母親、友達について分析することにした。

(1) 父親、母親、友達との人間関係の過去・現在・将来

①父親、母親、友達との関係の好ましさの程度回答を、好ましい関係(理想の～、宝物、大切な存在、大人の会話ができる、楽しい関係、見守ってくれる、などの記述がみられるもの)、好ましくない関係(不信、距離を置く、素直になれない、反抗して、ぎすぎすした関係、会話なし、喧嘩相手、無視する、いがみ合う、会わないようにする、などの記述がみられるもの)、それ以外の、どちらでもない関係(距離は近づいてきている、もっと話をしたいのに素直になれないときがある、かなり良い状態になった、広く浅く、表面上の付き合い、などの記述から、好ましい関係、好ましくない関係のどちらにも入らないと判断したもの)に分類し、好ましい関係(「+」と表記する)、どちらでもない関係(「△」と表記する)、好ましくない関係(「-」と表記する)の分布を表1に、グループ別人数と割合で示す。

表1より、すべてのグループで父親との関係、母親との関係、友達との関係いずれにおいても好ましい関係にあったと思っている者、好ましい関係にあると思っている者、好ましい関係にあるだろうと思っている者が多いことが分かる。第1グループの学生のうち、母親との将来の関係が好ましいだろうと思っている学生は92%という高率を示す程である。

どちらでもない関係と好ましくない関係の割合は、第1グループではあまり差はみられないが、第2グループ、第3グループではどちらも

表1 グループ別父親・母親・友達関係の分布状態(人数と割合)

		第1グループ			第2グループ			第3グループ		
		+	△	-	+	△	-	+	△	-
父親との関係	過去	21(81)	3(12)	2(8)	10(63)	3(19)	3(19)	7(50)	4(29)	3(21)
	現在	15(58)	5(19)	6(23)	9(56)	5(31)	2(13)	7(50)	5(36)	2(14)
	将来	21(81)	4(15)	1(4)	9(56)	5(31)	2(13)	10(71)	3(21)	1(7)
母親との関係	過去	19(73)	0(0)	7(27)	9(56)	6(38)	1(6)	10(71)	2(14)	2(14)
	現在	23(88)	0(0)	3(12)	14(88)	2(13)	0(0)	8(57)	5(36)	1(7)
	将来	24(92)	1(4)	1(4)	14(88)	2(13)	0(0)	12(86)	2(14)	0(0)
友達との関係	過去	17(65)	3(12)	2(8)	11(69)	5(31)	0(0)	8(57)	6(43)	0(0)
	現在	18(69)	3(12)	1(4)	12(75)	4(25)	0(0)	9(64)	5(36)	0(0)
	将来	17(65)	3(12)	2(8)	12(75)	3(19)	0(0)	9(64)	5(36)	0(0)

ない関係が好ましくない関係に比べて多いことがわかる。第1グループは短大1年次生、第2、第3グループは大学3、4年次生であることを考えると、年齢とともに人間関係の葛藤を乗り越えるという発達のみちすじが示唆されているのであろうか。

② 父親、母親、友達との関係の過去・現在・将来の状態

次に、好ましい関係に1点、どちらでもない関係に0点、好ましくない関係に-1点を与え、グループ毎の平均を算出し(表2)、過去・現在・将来の変化を図1-1～1-4に示す。

図1より、第1グループでは現在の父親との関係で落ち込みが大きいことがわかる。第2グループでは、母親との関係が過去から現在にかけて大幅に改善されている。また、第3グループでは、現在の母親との関係に落ち込みがみられる。全体的にみて、友達との関係はほとんど変化がみられないのに対して、父親・母親との関係においては、過去・現在より将来的に好ましいものになっていくと考えられていることがわかる。過去において、もしくは現在、父親あるいは母親との間になんらかの葛藤が存在した、存在しているということであらうか。

表2 父親、母親、友達との関係の過去・現在・将来の状態

		第1グループ	第2グループ	第3グループ	平均
父親との関係	過去	0.73	0.44	0.29	0.49
	現在	0.35	0.44	0.36	0.38
	将来	0.77	0.44	0.64	0.62
	全体	0.62	0.44	0.45	0.50
母親との関係	過去	0.46	0.50	0.57	0.51
	現在	0.77	0.88	0.50	0.72
	将来	0.88	0.88	0.86	0.87
	全体	0.71	0.75	0.64	0.70
友達との関係	過去	0.68	0.69	0.57	0.65
	現在	0.65	0.75	0.64	0.68
	将来	0.68	0.75	0.64	0.69
	全体	0.71	0.75	0.62	0.69
全体平均		0.68	0.65	0.57	0.63

現代青年の人間関係について

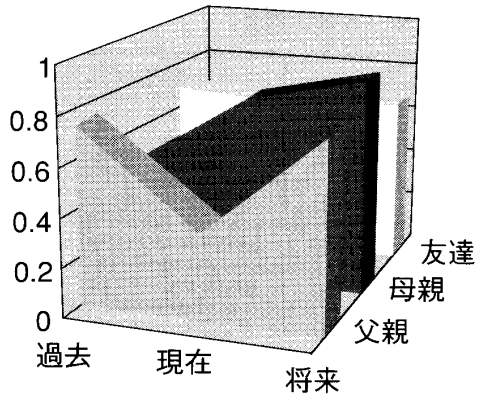


図 1-1 人間関係の変化 (第 1 グループ)

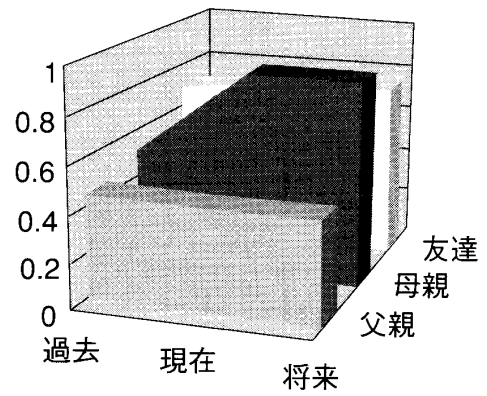


図 1-2 人間関係の変化 (第 2 グループ)

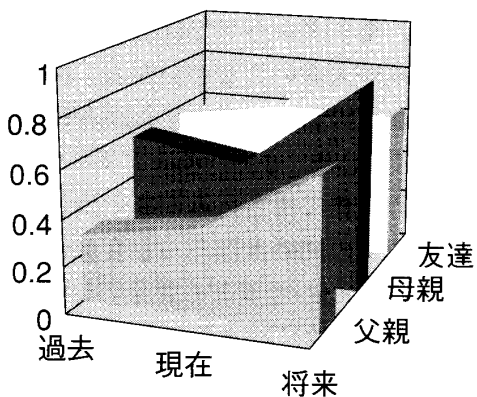


図 1-3 人間関係の変化 (第 3 グループ)

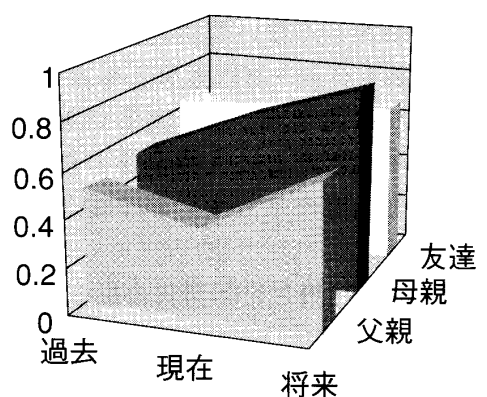


図 1-4 人間関係の変化 (全体)

③ 父親、母親、友達との関係の過去—現在—将来の変化

グループ毎の変化は図1-1～1-4のように表すことができたが、グループ内のすべての学生が同様の変遷を示すわけではない。そこで各学生がどのような変化をたどるのか、それぞれの変化パターンを表3にあげてみよう。

表3より、母親との関係、友達との関係に比べて、父親との関係に様々な変化パターンが存在することがわかる。

④ 父親・母親・友達関係の変化パターンの関連性

上記③で、父親・母親・友達関係の変化パターンにはさまざまなパターンが存在することがわかったが、それでは、父親との関係が好ましい者

は母親との関係も好ましいのであろうか。父親との関係が好ましくない者は母親との関係も好ましくないのであろうか。逆に、父親との関係が好ましくない代わりに母親との関係は好ましいのであろうか。また友達との関係はどうであろうか。

そこで、父親との関係の変化と母親との関係の変化、父親との関係の変化と友達との関係の変化、母親との関係の変化と友達との関係の変化、夫々の関連をみてみよう。

第1グループの夫々の関連を表4-1～4-3に示す。

表4-1～4-3は両者の関係(父親-母親、父親-友達、母親-友達)共に+++を示す者が多いことを示している。特に、母親・友達関係両者とも+++の者は46%と高率である。

表3 グループ別父親・母親・友達関係の変化パターン

	第1グループ	第2グループ	第3グループ
父親との関係	+++ , +△+ , +-+ , △+△ , -++ , △△△ , +-△ , ---	+++ , +△+ , △++ , +△△	+++ , +△+ , △++ , +△△ , △△△ , -△+ , --△ , ---
母親との関係	+++ , -++ , +-- , --+ , --△	+++ , △++ , △△△ , -△△	+++ , +△+ , +△△ , △△△ , △-+ , -△+
友達との関係	+++ , ++- , -++ , △△△ , ---	+++ , ++△ , △++ , △△+ , △△△	+++ , △++ , △△△

表4-1 第1グループ・父親関係の変化パターンと母親関係の変化パターンの関連(人数)

		父親との関係パターン							
		+++	+△+	+-+	△+△	-++	△△△	+△-	---
母親との関係 パターン	+++	8	2	3		1	2	1	1
	-++	2	1	1	1				
	--+	1							
	+--	1							
	--△	1							

表4-2 第1グループ・父親関係の変化パターンと友達関係の変化パターンの関連(人数)

		父親との関係パターン							
		+++	+△+	+-+	△+△	-++	△△△	+△-	---
友達との関係 パターン	+++	9	1	3	1	1	1		
	-++		1						
	△△△	1							
	++-			1				1	1
	---	1							
	NA	2	1				1		

表4-3 第1グループ・母親関係の変化パターンと友達関係の変化パターンの関連(人数)

		母親との関係パターン				
		+++	-++	+--	--+	--△
友達との関係 パターン	+++	12	4			
	-++	1				
	△△△	2				
	+++				1	
	---					1
	NA	2	1	1		

しかし、父親との関係が+++であっても、母親との関係、あるいは友達との関係には様々なパターンが示されている。また母親との関係が+++であっても友達との関係も様々である。

つまり個々の学生によって様々な関係が展開されるということである。

なお作表は控えるが、第2グループ、第3グループでも相似の傾向がみられた。

以上のように、多くの学生は身近な人と好ましい関係の中で生活していると考えられるが、父親あるいは母親との間に様々な葛藤が過去においてあった、また現在もあること、そして葛藤を乗り越え、いずれ好ましい関係に進むであろうことをうかがわせる結果であった。

(2) 人間関係で困ったこと

次に、第2グループと第3グループに対して提示した2つ目の質問に対する回答をみてみよう。

第2グループの1名のみが何も記述していなかったが、他の学生達は、何行にもわたって記述している。質問1に対して多くの学生が好ましい関係を記述しているにもかかわらずである。

では誰との間の人間関係で困ったのであろうか。対象別に表にしてみよう。

表5 人間関係で困った対象

	友達	父親	母親	両親	家族	NA
第2グループ	11	2	0	0	2	1
第3グループ	10	0	1	1	2	0
計	21	2	1	1	4	1
%	70	7	3	3	13	3

質問を父親、母親、友達に限定したわけではなくにもかかわらず、表5からわかるように、多くは友達との人間関係で困ったことを詳細に記述している。また、(1)で分析したように、友達との関係の過去・現在・将来は比較的好ましいにもかかわらず、2つ目の質問に対しての記述は圧倒的に友達に関するものが多いのである。

友達との間で困ったことは、学校、部活、バイト先での友達とのいざこざが多く、子どもの頃友達ができなかった、いじめられた、などの記述が若干みられた。顛末については「手紙を出すなど行動を起こしたことが転機になって、かえって信

頼関係が生まれた」という類の記述から、「喧嘩別れして」「切り抜けて」「耐えて」「あきらめて」新たな友達を獲得したなど種々みられ、現在特に困った状況ととらえている者はいなかった。

対象が父親のケースは、暴力を振るう父親、高圧的な父親であり、母親のケースは、支配的で過干渉な母親、両親のケースは愛されずに育てられたというものであった。父親の2ケースは現在あきらめている状態、母親のケースは未解決であるが折れている状態、両親のケースは変化の段階で、いつかは良くなると考えている状態である。

家族とのいざこざは、父親と兄あるいは父親と姉との対立が家族を巻き込んだものが2ケース、祖母と家族との関係が2ケースである。祖母と家族の関係1ケースは未解決のままであるが、他はとりあえず改善したと考えられる状態である。

以上のように、友達との人間関係、家族との人間関係で困った状況は、多くは改善の方向に進んでいるようであり、このことが質問1では多くの学生が好ましい人間関係を記述することになったものと思われる。しかし、友達と異なり、代えようと思っても代えることのできない家族との間の人間関係で困ったことのある場合は、より深刻で、未解決なままの可能性もあることをうかがわせる結果であった。

III 考 察

前章で、学生達の身近な人との人間関係の変遷をみてきた。

資料を眺めると、現代の学生達は身近な人々と好ましい人間関係を結び、平穏な毎日を送っているように見える。もはや迷いは存在しないかのようなのである。しかし資料を詳しく見ていくと、一部の学生は、決して平穏ではない人間関係を体験し、それを何とか修復しようと模索していることがわかる。

このように資料からは、多様な青年像が浮かび上がってくるのであるが、考えさせられるいくつかの点について考察を加えたい。

①現代青年の人間関係が好ましいことについて

学生達は比較的好ましい人間関係の中で生活していることがわかった。高校生とその親共々約9割が互いの関係をうまくいっていると認知し

ている資料もあるくらいである⁽³⁾。しかし、青年期の好ましい人間関係は本当に好ましいのだろうか。

青年期の重要な友人との関係における心理的距離をめぐる葛藤について検討した藤井⁽⁴⁾は、現代青年の山アラシ・ジレンマのあり方は、従来からの山アラシ・ジレンマの定義——ショーペンハウエル(1851)の山アラシの寓話から名づけられた、実際に相手との深い関わりをもつ中で生じる「近づきたい—離れたい」というジレンマ——とは少し異なり、深い関わりに入る前の段階で生じているという。つまり近づき過ぎたくない、離れ過ぎたくないといった、より「適度さ」に敏感なジレンマであるという。

このような人間関係について、大平⁽⁵⁾は「互いに傷つけ合うことを強く恐れ、相互不可侵の人間関係をとることがやさしさであるという社会的な風潮が関連している」と述べ、浜口⁽⁶⁾は「現代は、かつての相手との隔たりをなくした甘えのある日本独自の人間関係から、相手との適度な心理的距離を保って成り立つ新たな人間関係へと移行している時代であるといえようが、この人間関係のあり方は、いまだ成熟しきっているとは考えづらい」と述べている。

特に青年期が、様々な人間関係の中で自分の性格、能力、生き方、存在そのものについて考え、自我を確立していく時期であるならば、青年期の人間関係は、藤井⁽⁷⁾や大平⁽⁸⁾のいう適度な心理的距離を保った、好ましい人間関係のみでよいのだろうか。

関わりを展開する中で相互の関係性は質的に変化するが、青年達は質的な変化を体験しながら自我を確立していくものと思われる。自我確立の途上にある青年達には、特定の個人との深い、傷つけ合うこともあるくらいの関係も時には必要なのではないだろうか。

②疾風怒濤の青年観について

これまで青年期は疾風怒濤の時代と言われてきたが、本調査の学生達は比較的好ましい人間関係の中で生活していることがわかった。

果たして青年期は疾風怒濤の時代なのだろうか。疾風怒濤の概念について久世⁽⁹⁾を参考に考えてみよう。

青年期が疾風怒濤の時代とされたのは、ホールの著書が出版された1904年以後のことである。

ホールが打ち立てた、青年は不安と動揺とを特徴とした時期であり、青年の対人関係などは、緊張と葛藤に満ちているとする疾風怒濤の青年観は、青年心理学への関心が高まる契機になり、その後50年以上にわたって青年心理学の発展に影響を及ぼしたと考えられる。

しかし、「サモアにおける思春期」を著したミード⁽¹⁰⁾など、観察によって実態調査をしていた文化人類学者達は、比較的早くからホールの青年観には批判的であった。したがって当時から、ホールを師と仰ぎ、ホールの概念を肯定する記述が見られた一方で、ホールの考え方を批判するものも多く見られたようである。

その後、1960年代学園紛争が目立ち始めた前後から、疾風怒濤の概念についての議論がみられるようになり、青年期を疾風怒濤の時期とみる見解に疑問が呈され始めたのである。現実の青年像は、家族との生活に満足するものが比較的多く、友人との関係もまあまあであるというものが大半を占めるという理解である。

しかしジャーナリズムの世界ではいまだにステレオタイプな青年像が存在しているようである。

これらの状況は日本においても同様で、1910年にホールの研究が翻訳紹介されて以後追隨的な姿勢で研究が進められた結果、疾風怒濤というあまりにも魅力的な言葉に幻惑され続けて、今日に至ってしまったのではないだろうかと考えられる。

③青年期の多様性について

それでは青年期は、危機的な状況は何もなく、疾風怒濤の時期ではなくなったのであろうか。

「はじめに」で述べたよう、青年期は心身が成熟の水準に近づく時期であり、特に青年期の前半にあたる思春期は自分では予測できない身体的な変化に直面する時期である。また、かつての青年のようにじっくり構えて模索する時間的、精神的余裕はなくなったかもしれないが、受験、就職など自分のことを考えざるを得ない事象はどの青年にも存在するはずである。

現代は社会経済的状况により青年期が長く

なっており、危機が以前ほど明確な形をとらなくなったのは確かであろう。このことに関してコールマン⁽¹¹⁾の焦点理論は、青年期が長くなったことにより、青年期に現れる個々の問題はそれぞれ異なった年齢で突出し(焦点に入り)、新たな適応のためのストレスと一時的に集中することはほとんどないという。一時に一つの問題を解決し、次の時期に他の問題を処理するという適応プロセスを長くなった青年期の中で繰り返すことになり、内面的に多少の葛藤や危機意識をもっていても、表面的には何の心配もないようにみえるということになるだろう。

ほとんど危機を感じないで過ごす青年と模索する青年のいずれもが現代に生きる青年であろうが、それではこの青年期の多様性はどのように考えればよいのだろうか。

Bronfenbrenner⁽¹²⁾は、発達の生態学モデルを示し、子どもの生活は、家庭、幼稚園や保育所、学校、地域と多くの場面から成り立っており、そこで展開される人間関係は、他の場面で展開される人間関係の影響を間接的に受けることになることと述べている。

このように、個々の青年は幼児期、児童期を通じて、家族、仲間や学校などの様々な文脈と相互作用して、つまり、それまでの家庭、幼稚園や保育所、学校、地域で展開される人間関係に直接的、間接的に影響を受けながら青年期を迎えるのである。相互作用によるさまざまな経験が青年のさまざまな特性を形作っていくと考えると、そこには多様な青年像が描かれることになるのである。

④青年期の意義と青年心理学の課題について

以上の考察をふまえて、長くなった生涯の中での青年期の意味を考えると、青年期は長くなったその後を支えるためにますます重要な人生の一時期になると思われる。個々の青年が時間をかけて自分なりに結論を見出すことに青年期の意義があるといえるのではないだろうか。総じて考えると今日の青年期は穏かで緩やかなものになったと考えられようが、そこでは、青年期に至るまでのさまざまな経験や相互作用によって多様な青年の姿が展開されるはずである。

したがって、これら多様な青年期の発達的特徴を説明することが今後の青年心理学の課題にな

るのではないだろうか。多様性と変容を理解するには、横断的、縦断的方法によるさまざまな資料を解明することによって、児童期—青年期—成人期に至る道筋を明らかにしていくことが求められるだろう。そこでは、エリクソンの提唱したアイデンティティという概念が単に青年期の心理・発達の理解のみにとどまらず、成人期や老年期の人々の理解にまで応用されるようになっていくことから、実証的データを示して論じている岡本⁽¹³⁾や、青年個人の経路について5つの発達のパターンを示したコンパス⁽¹⁴⁾の研究手法が参考になると思われる。

生涯発達の中の一時期である青年期を解明するには、まず今日を生きる個々の青年の内面を丹念に分析・理解し、青年期特有の課題は何であるのか、そして、時代とともに変わるもの、変わらないものは一体何であるのかを明らかにしていかなければならないと思われる。

IV おわりに

青年期は一般的に内的混乱や葛藤の多い時期とされてきたが、現代の大学生達は、長期化しつつある青年期の中でどのような心理的特徴をあらわすのであろうか。その一端を探るために、身近な人との人間関係の過去・現在・将来の姿、および、これまでの人間関係において困ったことについて短期大学生・大学生に回答をもとめ、56名の回答を分析した。

多くの学生は総じて、身近な人々と好ましい人間関係を結び、平穏な日々を過ごしているが、過去においては父親あるいは母親との間にはさまざまな葛藤があった、また現在もあること、また一部の学生は、平穏でない人間関係を体験し、それを修復しようと模索していることを示唆する結果であった。現代青年の多様性を示唆する結果といえるだろう。

しかしながら、青年期における好ましいばかりの人間関係は、人格形成途上にある青年にとっては好ましいとはいえないのではないだろうか。また青年期は疾風怒濤の時代とされてきたが、魅力的な言葉故にいささか強調され過ぎてきたのではないだろうか。そして、多様な青年期の特徴を解明することが今後の青年心理学の課題であろ

うことなどについて考察を加えた。

悩む青年も悩まない青年も現代に生きる青年であり、このように多様な青年期を解明するには、面接法その他により丹念に資料を分析し、青年期の心理的特徴を明らかにすることが求められるのではないだろうか。

【引用文献および参考文献】

- (1) 拙稿 1996 緩やかになった青年期危機
高田短期大学紀要 第14号 1-13
- (2) 齋藤憲司 2000 大学生は何に悩んでいるか=青年期の拡散・希薄化のなかで= 清水将之(編) 子ども臨床の明日 ころの科学 94 2-11
- (3) 平石賢二 1999 親子関係の変化 佐藤有耕(編著) 高校生心理 I 大日本図書 125-150
- (4) 藤井恭子 2001 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究 第49巻第2号 18-27
- (5) 大平 健 1995 やさしさの精神病理 岩波書店
- (6) 浜口恵俊 1982 間人主義の社会日本 東洋経済新報社
- (7) 前掲書 (5)
- (8) 前掲書 (6)
- (9) 久世敏雄 2000 青年期的人格形成—疾風怒濤の概念について— 愛知学院大学文学部紀要 30 35-41
- (10) Mead, M. 1961 Adolescence in Samoa. 畑中幸子・山本真鳥(訳) 1976 サモアの思春期 蒼樹書房
- (11) Coleman, J.C. 19 Current Contradictions in Adolescent Theory. Journal of Youth and Adolescence, Vol.7, No.1. 1-11
- (12) Bronfenbrenner, U. 1979 The ecology of human development. Experiments by nature and design. Cambridge, MA: Harvard University Press.
磯貝芳郎・福富 護(訳) 1996 人間発達の生態学—発達心理学への挑戦 川島書店
- (13) 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学 成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味 ナカニシヤ出版
- (14) Compas, B.E., Hinden, B.R. & Gerhardt, C.A. 1995 Adolescent development: Pathways and processes of risk and resilience, Annual Review of Psychology, 46, 265-293

The Human Relations of Contemporary Adolescence

Tomoko NARITA*

The purpose of this report is to examine the mental states of contemporary adolescents.

Fifty-six junior college and university students were asked two questions:

First, students were asked about their past, present, and future personal relationships with friends and families.

Second, students were asked about relationship troubles they had experienced and the means by which they were resolved.

The results reveal that the majority of students now get along well with familiar persons, even if they had had conflicts in the past. Only a minority of students are continuing to have troubled relationships with familiar persons at the present.

Recently it has been argued that adolescence has become longer and that the stress of adolescence has become milder. This report shows that many youths are experiencing this today.

Although the issue of adolescent stress has often been emphasized, this phenomenon must be studied along with the lives of youths who are not experiencing too much stress. The level of stress must be studied in human relations and how it effects the development of youths.

I think that the most important theme in adolescent psychology today is to clarify the diversity of adolescents.

Key words : *human relations, adolescence, storm and stress, diversity*

キーワード：人間関係、青年期、疾風怒濤、多様性